

NEW AGE MYSTERY CLUB

SHINODA MAYUMI

KOMORI KENTARO

ASHIBE TAKU

MURASE TSUGUYA

KITAMORI KOH

SHIBATA YOSHIKI

NIKAIDO REITO

AIKAWA AKIRA

NISHIZAWA YASUHIKO

KODAMA KENJI

UTANO SHOGO

NEW AGE MYSTERY CLUB

SHINODA MITSUO
KOMORI KEN'YASU
ASHIBE TAKU
MURASE TSUGUYA
KAWAMOTO KOU
KUROKI TOSHIKI
NIKAIKO RYUJI
ARAWA AKIRA
KAWAZAWA YASUHIRO
KODAMA TOSHIKI
UTANO SHIRO

俱樂部

謎

ミステリー

ミステリー
新世紀「謎」倶楽部

平成10年7月25日 初版発行

監修者——二階堂黎人

著 者——篠田真由美 小森健太朗 芦辺 拓 村瀬継弥
北森 鴻 柴田よしき 二階堂黎人 愛川 晶
西澤保彦 蓑 健二 歌野晶午

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店



東京都千代田区富士見 2-13-3
〒102-8177 振替／00130-9-195208
電話／営業部 03-3238-8521
編集部 03-3238-8451

印刷所——図書印刷株式会社

製本所——株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本は小社営業部サービスセンター宛にお送り
ください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

© Mayumi Shinoda Kentaro Komori Taku Ashibe Tsuguya Murase
Koh Kitamori Yoshiki Shibata Reito Nikaido Akira Aikawa
Yasuhiko Nishizawa Kenji Kodama Shogo Utano 1998
Printed in Japan ISBN4-04-873116-5 C0093

¥2200

新世紀
謎
俱樂部
ミスアリ

装丁
角川書店装丁室

目
次

《新世紀》に捧げる前口上

芦辺

拓／二階堂黎人

6

● 十人目の切り裂きジャック

篠田真由美〈殺人鬼〉

9

● インド・ボンベイ殺人ツアー

小森健太郎〈アリバイ〉

37

● 《ホテル・ミカド》の殺人

芦辺 拓〈名探偵登場〉

79

● 藤田先生、指一本で巨石を動かす

村瀬継弥〈不可能状況〉

119

● 鬼子母神の選択肢

北森 鴻〈怪盗登場〉

161

観覧車

柴田よしき 〈失踪〉

189

縞模様の宅配便

二階堂黎人 〈誘拐〉

221

たつて、冷え性なんだモン！

愛川 晶 〈犯人当て〉

271

蓮華の花

西澤保彦 〈記憶の謎〉

329

新・煙突綺譚

畠 健二 〈人間消失〉

369

ドア↑ドア

歌野晶午 〈密室〉

419

《新世紀》に捧げる前口上

来年——一九九九年は、推理小説の始祖であるエドガー・アラン・ポーの生誕百九十年であり、同時に没後百五十年にも当たります。彼が「モルグ街の殺人」を発表し、『謎と論理の物語』という形態を確立したのが一八四一年ですから、以来二つの世紀にまたがってこの小説ジャンルは発展し、栄え続けてきたわけです。とりわけ、まもなく終わろうとする二十世紀が、チェスタトンの著名なアンソロジーの名前を借りるならば、『探偵小説の世紀』であつたことは間違いない事実でしょう。

今世紀に入ってから百年近くを、ドイルやヴァン・ダイン、クリステイー、クイーン、カー、さては我が国の江戸川乱歩や横溝正史といった偉大な作家たちが、様々な作品によって華々しく彩ってくれました。そんな彼らのはるかな後輩である私たちは、いつか先達を凌駕するような作品をもにしたいとの野望に燃え、実作に励んでいます。そして、この魅力的な小説ジャンルが、今や目前に迫つた新世紀にも旺盛に書き継がれ、熱心に読まれ続けることを強く願っているのです。

本書『新世紀「謎」倶楽部』は、そんな思いを込め、何よりも推理小説を愛して下さる皆さんのために編んだものです。収められた物語は全部で十一編。一堂に会した作家たちは一九五六年から六五年生まれ、デビューに至つては八八年から九四年に集中する、まさに来たるべき新世紀を担うにふさわしい（と、あえて言わせていただきます）執筆陣です。

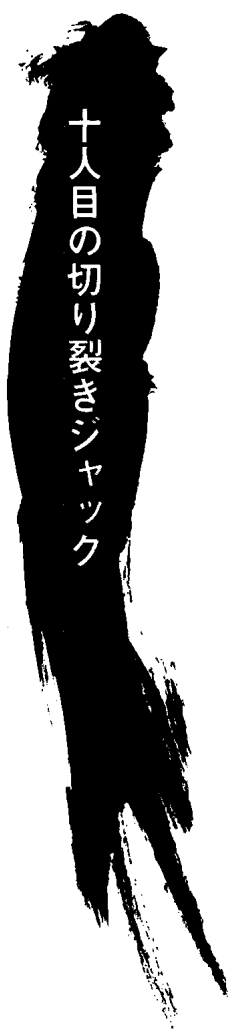
この新進気鋭の作家たちが自ら厳選した短編は、とびきりの趣向と奇想に富んでいます。どれもこれも面白いものであることは保証するまでもありません。ある作家は非現実的な謎を、ある作家

は総毛立つ恐怖を、ある作家は信じられぬ奇跡を、またある作家はトリッキークーなユーモアを、さらにある作家は人間の心理にひそむ不可解さを描き出してみせます。そして、魅力ある探偵や犯人たちと、彼らが操るトリック&ロジックは、必ずや読者の皆さんを魅了し、満足させることでしょう。数年前、当代随一の推理作家である鮎川哲也氏と島田荘司氏が、がっちり手を組む機会——大事件——がありました。彼らは、現代における本格推理小説の復興を願ひ、あえて新進作家を起用した『奇想の復活』という名アンソロジーを編みました。その中の何人かの作家はここにも顔を見せていますが、前者の意識と衣鉢を継いだ本書は、さながら「新・奇想の復活」といった観を呈しています。つまり、ここには推理小説の《現在》そのものがあると共に、《未来》をも明示しているわけです。二十一世紀の到来とともに満百六十歳を迎える、このジャンルの未来を！

——最後に、私たち『新世紀「謎」倶楽部』から、読者の皆さんにとっておきのお知らせがあります。

今回の短編アンソロジーに作品を提供した作家たちを中心にして、ある特別な計画が進行中です。それは……ここに成果を収めた当代の頭脳と腕が結集して、書き下ろしリレー形式により一冊の小説を執筆しようというものです。それも、できうる限り謎と論理の興味にあふれた長編本格推理小説をです！

果たして、どのような作品ができあがるか——それは、近い将来の完成時のお楽しみとして、まずはその前に、新世紀と、他ならぬ読者に捧げるこの十一の謎を存分にお楽しみ下さい！



十人目の切り裂きジャック

篠田真由美 Shinoda Mayumi

1953年東京本郷生まれ。蠍座A型。1977年早稲田大学第二文学部卒業。1980年夫と共に7ヶ月のユーラシア旅行。1987年『北イタリア幻想旅行』（三修社）刊行。1991年初めて書いたミステリ『琥珀色の城の殺人』で第2回鮎川哲也賞に応募、最終選考に残り翌年東京創元社より刊行され作家デビュー。その後講談社、中央公論社、徳間書店、学研などにミステリと幻想小説を主として発表、現在に至る。

殺人鬼

二階堂 オープニング短編は、ただいま《建築探偵シリーズ》で大人気の篠田真由美氏の登場です。作品名は「十人目の切り裂きジャック」。切り裂きジャックと言えば、十九世紀にロンドンを騒がせた有名な殺人鬼で、犯罪の歴史の中では超スターですよ。

芦 辺 そして、多くの小説家の創造力を刺激してきた怪物でもあります。

二階堂 シャーロック・ホームズが切り裂きジャックと対決するエラリー・クイーンの『恐怖の研究』とか、ベロック・ローンズの『下宿人』、ロバート・ブロックの「切り裂きジャックはあなたの友」、それからS・A・ステーマンも『殺人者は21番地に住む』を書いていました。

芦 辺 『下宿人』は、若き日のヒッチコックが映画化したことでも知られています。それと、トマス・バークの「オッターモール氏の手」は絞殺魔ですが、これもジャックの影響を抜きにしては考えられないそうです。ともあれ、霧に紛れて犯行を重ねていく殺人鬼のイメージは、ミステリーの形を通して多くの人々の心に焼き付けられてきたわけです。

二階堂 日本の作家でも、例えば島田荘司氏が……

芦 辺 『切り裂きジャック・百年の孤独』という傑作を。

二階堂 あれは非常にトリッキーな作品で、切り裂きジャックものに新境地を開きましたね。また、翻訳家の仁賀克雄氏は、『ロンドンの恐怖』という研究書を正・続二巻著しましたが、現時点で世界最高の論考と言われています。

芦 辺 ジャックといえば、スクリーンでも悪事のし放題。たとえば、映画「タイム・アフター・タイム」は、『シャーロック・ホームズ氏の素敵な冒険』を書いたニコラス・メイヤーの脚本・監督

によるものですが、何とタイムマシンに乗って現代のロンドンに現われた切り裂きジャックを、H・G・ウェルズが追っかけるというファンタスティックな物語でした。

二階堂 切り裂きジャックは過去だけでなく、現代にも、未来にも出現しうる。それだけ、魅力的な素材なわけですね。

芦 辺 ちなみに、ジャックの正体については当時から諸説紛々なんですが、史上最珍の説を作家のジョン・スラデックが唱えているのをご存じですか。

二階堂 あの『見えないグリーン』の？

芦 辺 ええ、それに先立つ『黒い靈気』という作品の中で、素人探偵のサッカレイ・フィンが推理というより妄想するんですけどね。切り裂きジャックは一部で噂されていたように医者で、しかも僕らもよく知っている有名な人物だというんですが……ちよつと耳を貸してください。

二階堂 そうですね。ふむふむ、何ですって……えつ、そんなバカな！

芦 辺 どうです。ミステリー・ファンなら誰でも大喜びうけあいの説でしょう？

二階堂 むしろ、激怒するんじゃないかなあ（笑）。

芦 辺 それもそうかな。ま、ともかく、今回この本の巻頭を飾る篠田氏の「十人目の切り裂きジャック」というのは……。

二階堂 「霧のロンドンを徘徊した殺人鬼が、現代の日本、しかもこの東京に蘇ったら」というテーマで書かれた恐怖の物語です。

芦 辺 ショッキングな展開に意表を突く結末が見事の一言ですね。

二人 それでは、存分にお楽しみください。

『「切り裂きジャック」のことなんだけど……』

電話の向こうから羽田^{はねだ}の、暗い、ほとんどゾンビのような声がそんなことばをささやいてきたときも、俺は少しも驚かなかった。直接彼の声を聞いたのは、かれこれ七、八年ぶりのことだ。だが他の話題だったら、むしろ驚いたろう。当人がどこまで自覚しているかは知らないが、このところずっとあいつが口にする話といえどもつばらそればかりだ、というのは大学以来の遊び仲間の中では有名な話だったからだ。

そんな妙な関わり合いもない一般の日本人に、どの程度の予備知識があるのかわからないから、一応簡単に書いておくことにしよう。十九世紀末のロンドンの裏町で、娼婦^{うやうや}が次々と喉^{のど}を切られて殺される事件が起きた。ヴィクトリア、すなわち勝利という景気のいい名前の、団子^{だんご}みたいに丸くて小さな婆^{ばあ}さんが延々として王座に君臨し、イギリスが大英帝国として世界に覇を唱えた、いわば繁栄の絶頂期に、その暗部をえぐるようにして起こった猟奇犯罪だ。

物語の世界ではシャーロック・ホームズがガス灯の下を馬車で走り過ぎ、闇にはルーマニアからはるばるやって来たドラキュラ伯爵がひそんでいた、そんな世紀末。偽善的な美德の陰の退廃に彩られたヴィクトリア朝の、いま思えば『古き良き』、なんて形容詞がついてきても不思議ではないような事件。しかし当時のイギリス社会は、姿なき殺人者に文字通り震撼^{しんかん}し、新聞は無能な警察を叩き、議会でも対策が検討され、巷^{ちまた}では女の悲鳴ひとつで「それ、また殺人だ！」と人が走り出すような、ほとんどマス・ヒステリックな状況にさえなつたらしい。ついに迷宮入りのまま終わつたその連続殺人

事件の犯人の、いわば愛称が『切り裂きジャック』だ。

世の中にはこの謎を研究するマニア、リッパロジスト、とかいう連中が相当数いるというのだが、羽田の熱中振りはいかにも度が過ぎていてかなりクレイジイだった。薄情なもので大学時代は、金持ちのお坊っちゃんである羽田の金であれだけ遊び回った仲間たちが、いまは顔を合わせては彼のいかれぶりを冗談の種にする。

だが俺は他のやつらのように、羽田を笑ったり馬鹿にしたりする気にはなれなかった。やつがそんなものに取り憑かれたのには、ちゃんとわけがあるのだ。俺は誰よりもよく、それを知っていた。

「良かったら今晚、話を聞いてもらえないかな……」

「いいよ。じゃ、久しぶりにおまえのマンションまで行こうか」

学生時代はしょっちゅう入り浸っていた、羽田の贅沢な高層マンションを思い浮かべながら、気楽に請け合った俺の耳に、不気味なささやき声が聞こえてきた。

「そう、来てくれるの。ありがとう。あ、でもぼく前とは、部屋変わったから」

「へえ、引っ越したのか」

「うん。でも君も知っているところだよ。新大久保のミラーズ・コート・ハイツ一一三号」

「おい、その部屋ってまさか——」

「そのまさか、さ。じゃ、六時にね……」

一方的に通話の切られた受話器を、俺はしばらくそのまま見つめてしまった。ミラーズ・コート・ハイツ一一三号。それはいまからちょうど十年前、羽田の恋人で俺とも親しい遊び仲間だった黒沢真理亜が住んでいた部屋だ。

俺たちは当時A大学の、某サークルを根城にしていた。名前や名目は一応もってもらいしのがあったが、内実は飲んで遊んでだべって、まあそれだけの気楽なお仲間だ。俺は普通の学生だが、羽田は父親が一部上場企業の重役で、金回りのいい分みんなの鴨にされていた。それを気がついているのか

いないのか、ばやんとお人好しで子供っぽくて、求められればいわれるままにいくらでも金を出す。羽田はそんなやつだった。

羽田と俺は同年年で、真理亜はひとつ下。身長は百八十近く、浅黒い肌に大きな目の印象的な、そのまんまモデルがやれそうな野性的な美女で、月並みな形容かもしれないが、女豹めうのような、ということばがそのままぴたりくる。彼女がサークルに入ってきた途端、無論俺も含めて野郎どもは目から火花を飛ばした。しかし彼女を射落としたのは、おおかたの予想を裏切っておっとりお坊っちゃん羽田だったというわけだ。俺たちは悔し紛れに、羽田の財布から搾り取れるだけ搾り取って飲みまわってやった。

しかしそれから一年と経たず、真理亜は殺された。『昭和の切り裂きジャック』といわれた、連続女性殺人犯の手によって。その犯人もまた、未だに捕まっていなかった。

万事忘れっぽい世の中のことだから、あの事件をきちんと記憶しているやつなんて、もうあまりいないだろう。一九八八年の八月末から十一月にかけて、東京新宿歌舞伎町の路上で、女性が四人次々と切り殺される事件が起きた。鋭利なナイフで喉の血管と気管を切断し、その後腹部を縦に裂いて内臓を抉えぐるという極めて残虐な犯行だった。

この事件がロンドンの『切り裂きジャック』事件と似ていると、マスコミが言い出したのは二人目の犠牲者が出てからだ。しかし俺が真理亜からそう聞かされたのは、最初の殺人が起こった直後だった。

「ロンドンで第一の殺人が起きたのは一八八八年の八月三十日よ。ちょうど百年前、それも日付まで同じだなんて、これが無関係なはずはないわ！」

真理亜は大きな瞳ひとみをきらめかせてそう断言した。浅黒い頬には血の色が昇り、唇さえ色を増している。その唇を赤い舌先で絶えず舐なめながらまくしたてる表情は、美食家がすばらしい料理を前にしたか、あるいは性的に興奮しているとしか思えぬ顔だ。俺は内心呆あきれ、なんて女だと思った。